

心理学 ミュージアム



東京国際大学人間社会学部 教授
高砂美樹

Profile — たかすな みき
1991年、筑波大学心理学研究科修了。学術博士。ミシガン大学研究員、筑波大学助手、山野美容芸術短期大学講師を経て、2001年より現職。専門は心理学史、神経科学史。主な著書は『流れを読む心理学史』（共著、有斐閣）、『心理学史ははじめの一步』（単著、アルテ）など。

日本人女性心理学者の博士号（Ph.D.）



写真1 原口鶴子（1914）

出典は、荻野いずみ編著（1983）『原口鶴子』銀河書房

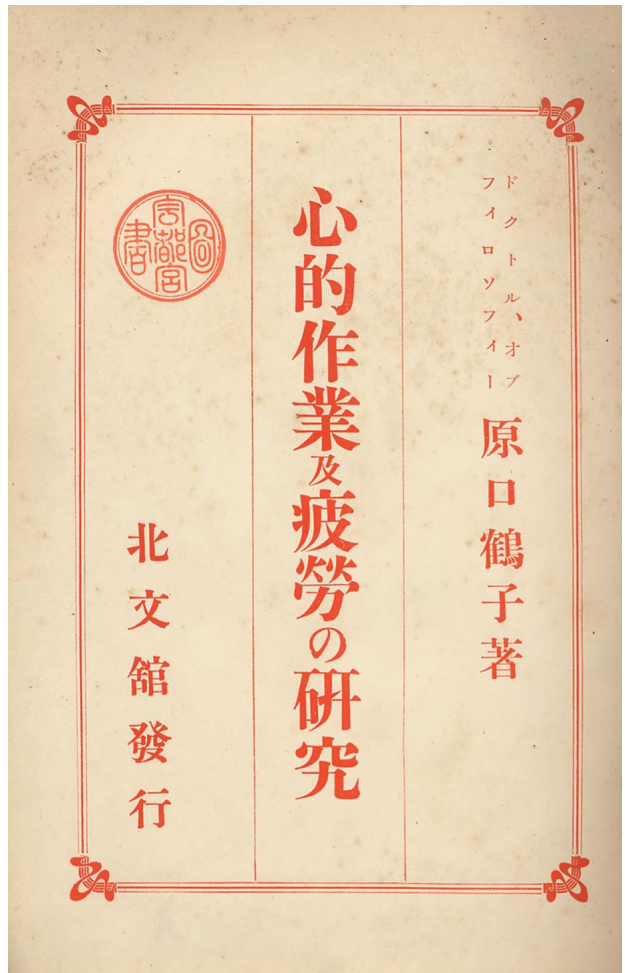


写真2 『心的作業及び疲労の研究』（1914）表紙

今年には原口鶴子（はらぐち つるこ、1886－1915；写真1）が日本人女性として最初に博士号（Ph.D.）を取得してから、ちょうど100年にあたります。1912年の7月に原口（旧姓・新井）鶴子は、ニューヨークにあるコロンビア大学から哲学博士号（Ph.D.）を授与されました。それ以前に医学博士（M.D.）を取得した日本人女性としては岡見京子でしたが、Ph.D.は他分野を含めても初めてです。またこの初の学位が心理学者に授与されたということも印象深いものがあります。原口鶴子の学位論文は「心的疲労」に関するもので、指導教授はソーンダイク（E. L. Thorndike, 1874－1949）でした。授与式の日には結婚式も行った経緯については、本誌創刊号の「ぐらふいっく日本心理学史 第1回」に掲載されていますので、ご参考までに。

自身の学位論文をもとにして増補加筆されたのが主著『心的作業及び疲労の研究』（写真2）です。1914（大正3）年に出版され、序文は松本亦太郎が書いています。残念ながら、原口鶴子はこの著書を刊行した翌年に病気で29歳の若さで亡くなりましたが、彼女を悼む学校葬（母校は日本女子大学校、現在の日本女子大学）に参加した女学生のなかに、日本の女性心理学者で二人目となるPh.D.を同じくコロンビア大学から授与された高良とみ（こうら とみ、1896－1993）がいました（写真3）。高良（旧姓・和田）とみの研究は空腹状態に関するものでしたが、実験自体はジョーンズ・ホプキンス大学で行われ、動因の研究で知られるリクター（P. Richter, 1894－1988）が実際の研究の指導を行っていました。高良とみが戦後すぐに参議院議員となって平和活動に従事したことを考えあわせると、飢餓と戦争の関係について早くから関心を抱いていたことがわかります。

日本人女性心理学者で戦前にPh.D.を取得した人は全部で三人いました。三人目は實生すぎ（みばい すぎ、1891－1969）です。当時としては異例ですが、實生すぎは戦前に三回渡米しています。神戸女学院を卒業後、カリフォルニア州の女子大であるミルス大学で学士号（B.A.）を取得し、さらにミシガン州にあるミシガン大学で修士号（M.A.）を取得したのが一度目です。そのあと裕福なお嬢さんのお伴として1年半欧米を外遊し、三度目にはミシガン大学へまた戻ってPh.D.を取得しました（写真4）。博士号を授与された論文は「仮現運動」に関するもので、これもちょうど100年前の1912年のヴェルトハイマー（Max Wertheimer, 1880－1943）の研究で有名になったものです（次号のこのコーナーで取り上げる予定です）。實生すぎは生涯独身でしたが、留学後は母校の神戸女学院大学教授や梅花学園長を歴任しました。三人とも実験的研究で学位を取得しているところが時代を反映しているといえそうです。



写真3 学位授与時の高良とみ
出典は、『高良とみの生と著作』（ドメス出版、2002）パンフレット



写真4 学位授与時の實生すぎ
出典は、實生すぎ著（1958）『これも一生』
梅花学園同窓会